

# 人間と自然の調和

金 東 圭

(韓国、高麗大教授)

## 1. はじめに

今日、われわれ人類には、解決すべき深刻な4つの地球的問題点がある。

それらの一つが核問題であり、二番目は、民族間の粉糾（いわばNeo-nationalism）、宗教または教派間の葛藤が三つ目、四つ目が各種の環境問題にかかわる生態系の危機である。ところが、それらの中でも人類の生存を根元から脅かすのは生態系の破壊問題で、それは全地球的問題でもある。

本論では、これらの問題中、環境問題の解決にはいかなる方法があるかに中心を合わせ、環境関連の理論と環境観、問題発生の原因を考察した後、人間と自然との調和に役立ついくつかの提案を理論としてまとめようと思うのである。

## 2. 自然観の形成と発展

古代社会では、東西洋ともに、人間は自然の一部であり、したがってあらゆる生物（動物、植物）はもちろん、山や土地にまで、生物と同じく生命と魂があると信じた。それをわれわれは、物活論とか、拝物教とか解釈している。古代インディアンから、ニュージーランドのマオリ族、アフリカのビグミー族、そしてブラジルの原始林での原住民に至るまで、現在でもそれらの自然観で生活しているのを見ることができる。

しかし、西欧の近世史からは、自然は単なる物質であり人間とは切り離された対象物として操作可能なものと考えた結果、自然支配思想が芽生えはじめたのである。このような考え方（思考）が、即ち人間中心主義であり、機械論、物質主義、科学的合理主義、そして利己的個人主義として発展し、人間と自然との不調和を作り出したのである。

ところが、東洋の社会では、人間は自然の一部であり切り離されたものでないと信じつづけたのである。中国での道教思想、東南アジア諸国の仏教、日本の神道思想がそれである。しかし、今日に至っては、これらの東洋の伝統思想が西欧化の発展過程で変り、自然と人間との不調和の思考と価値観に落ちている。

## 3. 反環境主義の根源

まず、環境危機の歴史的な根元は、人間の自然支配思想を信仰的次元で考えているユダヤ教から発見することができる。

ユダヤの旧約聖書の「創世記」によれば、神は人間を自分の形相（表像）としてつくった後、万物が人間の為にあるように定められた。

一方、環境危機の根源は、科学と機械技術の結合から発見できるが、西欧の環境主義者らは、それは、「創世記」のような宗教的信念より科学と技術文明によるものが最も強い原因であるとみている。

「創世記」の第1章28節には、神が人間を作った後、人間に対する恩寵として「生めよ、増えよ、地に満ちよ、地を従えよ」と人間に言われた。

しかし、Black とAttfieldは、「創世記」での人間の自然支配権を、制限された人間の責任であり、神からの委任であって、決して独裁的全権ではないと論じている。

同じくわれわれは、人間中心思想を「新約聖書」の中からもみることが可能である。それは、イエスが万物を愛するように語ったが、平等的な愛ではなかったことを意味する。

例えば、イエスが40日間も野生動物と一緒に生活したときである。Galilee 湖水を渡るために、彼は数回説教を行ったが、後には動物の群れから離れ彼らを捨てたことである（ヨハネ福音章4:35、6:45、8:13）。この文章からみると、イエスは、自然（人間以外の自然生物）を一つ的手段と方法として取り扱ったことになるのである。

ともかく、ユダヤ・キリスト教の遺産は、人間は万物の支配者であることを信念化させ、それが結局のところ人間中心主義と反生態主義のイデオロギーを生み出すようにしたのである。

次は、R. デカルトの二元論から論議することができる。

彼は、あらゆる事象は根本的に二分することが可能であると主張した。精神と身体、人間と自然との関係がそれである。このような彼の存在の見方、自然の本質観、価値観は、今日の反環境主義の哲学的根拠を提供したのである。

彼の数多くの哲学的貢献にもかかわらず、彼の学派は西欧の近代化過程において環境主義への貢献には失敗したのである。R. デカルトは、人間と動物の身体を自然から疎外された機械として考えたのである。これらの思考方法がのちには実用主義とマルキシズムと結びつけられるようになったのである。彼の有名な「方法叙説」のなかでは、我々は「自然の支配者にして、所有者になることができる」と書き、ユダヤ・キリスト教の人間と自然観の見方と全く同じ立場を取っている。

#### 4. 環境主義への復帰

近代の西欧哲学思潮の主流が反生態的環境主義であっても、T. ムアーや A. N. ホワイトヘッド、W. ジェイムズらは自然保護主義的哲学者であった。さらに、J. レオポルト、J. B. カルコット、M. ブクチン、R. カーソン、A. ネスの他、今日の数多くの環境主義者たちは、人間中心の価値観と判断力による環境観と自然観に強い批判を加え続けてきたのである。

ノルウェーの著名な哲学者、A. ネスと一団の同僚たち（主に、B. ディーバルとG. セッションズ）は、環境主義を浅いエコロジーと深いエコロジーとに分けて説明している。

ネスの見方によれば、浅いエコロジーとは人間を全ての価値の中心に置き、他のものは一つの手段的価値に帰結させる見方をするが、深いエコロジーは、人間を生態系の構成員とみなし生命網の一つとしてみ、脱人間中心主義的であるとみるのである。ここでわれわれが見逃すことができないこととしては、J. ラブロックによる、いわば「ガイア理論」である。彼の「ガイア仮説」は、生命体宇宙論に基づいている。即ち、地球は人間の身体のように生理的メカニズムを持っていると主張した。

一方、統一神学（原理）では保守根本主義神学とは違って、人間は万物の縮小体であり、<表1>からわかるように、人間の心は、“性相”という概念で、鉱物と植物、動物との本質と連関されていると見ている。これはガイアの見解とともに東洋の伝統的道理思想ともつながることである。

## 5. 人間と自然との調和法

結論として、今日欧米にて論じられている環境主義論と環境運動を考察しながらいくつかの提案をしたいと思う。

皮肉的にも、環境問題発生の原因提供者でもある西欧社会からNGO と Non=NGOの方法で環境問題に関する研究や運動が活発になされている。自然との不調和と葛藤の状態から調和と協力の関係に改善するためには、人間は自然にもどり自然に対する価値観を改革すべきである。その方法として：

(1) 東洋の伝統的価値観の回復 — 仏教の中心概念は「慈悲」であり、道教の基本思想は「無為自然」である。なお、日本の神道は「畏敬」である。

自然に対する慈悲は即ち環境倫理であり、無為自然は自然保全や自然保護の思想である。自然への敬畏はスピリチュアル環境主義の哲学である。

(2) 人間性の回復 — 本来の人間の本質は善であり完全性の存在であったが、人間の墮落によって罪と悪の実体になったのである。もし、人間が墮落しなかったら自然との関係も問題点がなく、神の恩寵のように万物の支配権の資格があったのである。しかし、墮落した人間が自然を支配（管理）するからあらゆる罪悪が生じてくるのである。これも根本主義神学と異なる統一神学観である。

これらの観点からみると、パスモアアーの環境倫理学ともつながる。J. A. パスモアアーは、『自然に対する人間の責任』の中で、西欧の文明史における知性と道徳と政治の状況を考えると、人間は生態環境の生存に対する責任を負うべきであると語ったのである。

キリストの愛は、人と人との愛より人と自然との愛にまで発展しなければならない。こういう意味からみると、統一教会での「万物の日（5月1日、陰暦）」という儀式は優れている。

### (3) 環境教育による人間の自然観に対する意識革命 —

教育心理学的に言うと、意識改革の方法は学校教育的な接近法が人の心を変える最善で効果的な方法論である。なぜなら、行為の主体は人間であり、人間の主体は意識であるから、その意識を統制するのが即ち教育であるからである。

歴史的な記録として、1975年ユーゴスラビアのベオグラード会議において、地球的環境教育に関する「ベオグラードの憲章」が発表された。「憲章」では、環境教育を、全般的に、計画的に、生態学的に、経済と技術、制度と文化、社会と審美的に接近すべき基本原則が提示されたのである。

最後に、われわれは環境問題に対する理論と運動方法を啓発すべきである。いわゆる「持続可能な発展」という理論 — 緑の経済学、緑の政治学、緑の哲学、緑の倫理学、エコフェミニズム、エコトピア、草の根の環境運動、緑の農業、などがそれである。日本で、福岡正信が経営している自然農法は緑の農業においても最も理想的なモデルである。彼は人間と自然（農業）を神に連結したのである。

環境問題（公害）はある地域や国家だけの問題ではなく、全地球的問題である。これらの現地からも、われわれは、いわばディプエコロジー運動でいう、NIMBY（自分の裏庭だけは困る）よりNIABY（誰の裏庭でも困る）というN. フルイデンバーグの表現を取るべきである。

## 6. 結論および論議

要するに、人類は自然に問題を与え、墮落した人間によって作られた公害から自然は酷く病んでいる。しかし、人間もそれによってあらゆる疫病から苦しんでいる。癌やエイズ、異常気候などがそれである。人間の癌は人間の自然搾取に対する自然の人間への報復であり、エイズは人間の倫理的人間性の喪失に対する天からの罰であり、異常気候は人間の自然汚染に対する答えであると私は見ている。

本論の一つの論議点としては、人間と自然との調和のために、果して人間は古代の原始社会の状態にもどるべきであるかということである。それを、F. カプラは『新ターニングポイント』で、太陽の時代（solar-age）への転換によって可能であるとも語っている。

ともかく、われわれは次の文章をわすれてはならない。「自然は人間がなくても生存するが、人間は自然がなくては生存できない」ということである。

<表1> 存在者の性形の階層的構造

		(人間)			
性相	↓		(動物)	生心	}
			本能(肉心)	本能(肉心)	
形状	↑	(植物)	生命(自律性)	生命(自律性)	}
		生命(自律性)	生命(自律性)	生命(自律性)	
		(鉱物)	物理化学的作用性	物理化学的作用性	}
		物理化学的作用性	物理化学的作用性	物理化学的作用性	
		原子・分子	原子・分子	原子・分子	}
		原子・分子	原子・分子	原子・分子	
			細胞・組織・構造・形態	細胞・組織・構造・形態	}
			細胞・組織・構造・形態	細胞・組織・構造・形態	
			感觉器官・神経	感觉器官・神経	}
			感觉器官・神経	感觉器官・神経	
				霊体	}
				霊体	

[References]

- Attfield, R., The Ethics of Environmental Concern, The Univ. of Georgia Press, 1991.  
 Burgemeier, B. (eds), Economy, Environment, and Technology, SSE, 1994.  
 Dunlap, R. E., American Environmentalism, Taylor&Francis, 1992.  
 Hargrove, E. C., Foundations of Environmental Ethics, Prentice-Hall, 1989.  
 Des Jardins, J., Environmental Ethics, Wadsworth Co., 1993.  
 Hoffman, W. M., The Corporation, Ethics, and the Environment, Quorum Books, 1990>  
 Velde, P. V., Global Mandate, Alpha editions, 1985.  
 UTI (eds), Essentials of Unification Thought, Tokyo, 1992.  
 The Holy Spirit Association, Divine Principle, USA, 1973.  
 福岡正信『自然農法, わら一本の革命』春秋社, 1992.